
勇者さまを召し上がれ

湖真子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者さまを召し上られ

【Nコード】

N6052V

【作者名】

湖真子

【あらすじ】

ドジで泣き虫でスツゴク弱い僕は勇者に選ばれ、魔国の城を目指して旅をする。そんな僕の旅の仲間是最強の魔術師と剣士。

僕よりも二人の方が勇者にふさわしいと思うんだけど……！
で僕が勇者なの？！
お願いだから代わって……！！
何

その1（前書き）

へタレ勇者様頑張ります！。

その1

三人で旅をしている。僕以外は女性。

ここはカッコいい所を見せなくちゃ!!

っと言う、初めの目標は出会って三秒に消えた。

僕の名は、トール・デイズ。魔法学校では補習と留年のオンパレードの落ちこぼれ。

しかも泣き虫でドジ。

歩きやすくなっている森の中にある小道で僕はこけた。

「ぎゃふんっ!!」

うううう…顔面から行ったよおお…。

慣れていても、痛いものは痛い。初め、「大丈夫?」と言ってくれた二人も今では放置。

「トール結界を!」

仲間のその指示を聞くまで危険だと言う事に気が付かなかった。

「へっ???」

相手は待つてはくれない。その証拠に僕達の周りを悪者顔した大男たちが取り囲む。

いっ…急いで張らないと!!!!

慌てたのが不味かった。

「トール・デッ!!」

呪文を唱えようとした僕は舌をかんだ。

い…痛いっ!!!

そんな僕に溜息つきつつも、ピンク色した髪のふわふわ系の可愛い少女が僕に魔法をかけた。

「トール・デイズ・ボロニャーボッポ!!!」

僕の周りに結界が張られた。

うん、情けない…自分の名前で舌かんだよ。

しかもこの少女は目の前にガッシリとした、いかにも悪者ですって顔をした大男達と戦っている。この大男達は山賊だ。二十人位の人が僕たちを襲う。

ぎゃああああー!!! ピッ…ピンチ!!!

…と、思うのは僕だけ。

その証拠に嬉しそうな顔して少女は次々と魔法を放っている。

一度に複数魔法の同時発射ってどんだけ凄いのー!!!

どんだけ凄いかと言うと、…例えるなら同時に日本語と英語とフランス語を喋りながら数学の公式を解き、的に向かって物を投げている様なもの。

あれ? 分かり難い? …兎に角、凄すぎる事なんです!!!

「さあ、死にたい奴はかかってきな?」

そう言って剣で倒していく赤毛の凛々しい顔立ちの少女。

そして僕は言う…。

張って貰った結界の中でその戦いを傍観しています。

だって、僕は弱すぎて戦闘外なんですうっ！

見ているだけで怖くて涙が出そう……。

僕にできる事は邪魔しない、動かない、人質にならない。この三つだけなんですううっ！！

頑張って二人とも！！　ちよっと、大男達が可哀想な気がするけどっ！！

「はーはははは！！！！　思い知ったか！！！」

高らかに叫ぶ女剣士。この国では有名の女剣士。国で三人しかいない、剣王の名前を持つ一人。剣を使いながら魔法と武術を同時に扱う最強。

「結構弱かったです……」

そう言って残念と呟く魔術師。国の守り結界の要の人物で、国一番の魔術師。

こんな最強な二人と旅する僕は、‘勇者’と呼ばれている。

魔法を使おうとすれば舌を噛み、剣を持てばこけそうになり（逆に怪我する……）武術が変てこな踊りになる僕は激弱です！！！！！！

何で僕、‘勇者’って呼ばれてるの！！？

寧ろ二人がその名に相応しいのに！！！！

そう思っでは落ち込みます……。

「キャン！」

「？」

溜息をつくど、木の影に小狐の様な動物がいる事に気が付いた。その動物は足に怪我をしている。

…さっきの戦闘に巻き込まれたのかな？

そう思った僕は唯一得意な癒しの魔法をかけた……んだけど。

『ぼふううん！』

「あれ？」

「ちよっ！ 何した？！」

傷の治った小狐は僕よりも大きい狐に…。

…そうだった…僕の治癒魔法は他人にかけると失敗するんだっ
たっ！！

元小狐は僕のほっぺをペロペロ舐める。

かっ…可愛い…。

「…おとなしそうだし、トールに懐いてるしコレに乗って行きま
しょう」

「そりゃぁ良いな。トールのペースに合わせると、この森を出るの
がいつになるか分からないしな！」

「……」

…とろくてごめんなさいいっ！！

酷く、いたたまれナイ！

高々と聳え立つ城。

「大きい…」

元小狐に乗ったらあつという間に着いた魔王の城。因みに僕は落ちないように魔法で縛られたけど！

「さてと、‘勇者’、行きな」

ニヤツと笑って女剣士は僕の背中を押した。

ええええええええええ！！！！　　ここで？　　いやいや、確かに目的地到着

だけど！！！！

激弱な僕が城の中に入ったら一瞬で消える…。

あれ？　今更ながら気付いたけど、魔族に因る被害って聞いた事無

いよ…ね？

馬鹿だから自信ないけど！

魔王が世界征服するって言う噂も聞いた事が無い。

あれ？　何で僕ココに来たの？

倒す必要ってないよね？　激弱だから逆に倒されちゃうけど！！

寧ろ、最強な二人が行くべきでしょ！！　　…僕は留守番します！！！！

命が欲しいんで回れ右…。

「固まってねーでとつとと行け！！」

そう言っって女剣士に蹴られて扉に顔を強打。

「ぐふっ！　ううう…痛いよおお…」

その場に蹲っていると、内側から扉が開いた。

「いらっしやいませ。お待ちしておりました」

「え？　……」

扉を開けたのは目玉が片方だけの所々肌の色がおかしい…そう、ゾンビだった。

「うぎゃあああ!!!」

「すみません。遅くなりました」
丁寧にお辞儀する魔術師。

ちよっ！ 何でそこ冷静なの！！ 挨拶している場合じゃない？！
ゾンビだよ？！ ホラーやだよおお！！！！

半泣きな僕に女剣士の冷たいツツコミが入る。

「口閉じろ。魔王の城に人間が居るわけがねーだろうが！」
：そうだった。ここに居るのは魔族と呼ばれる者たちだった。

「……なるほど。移転した方が早そうですね」

「へっ？」

ゾンビはそう言うのと僕の足元に魔方陣を描き、呪文無しで僕を飛ばした。

ええええええええええ！！！！

あの二人から離れたら絶対、確実に生きている自信が無いです！！！！

温かい…

「……んう？」

クスクスと笑う女の人の声。どうやら僕は飛ばされたショックで気を失っていたらしい。
目をあけるとそこには…

「!?!」

長いくて艶やかな黒い髪を持つ、グラマーな体形のお姉さま系美少女がいた!?!!

しかも僕、その女性に膝枕されていたみたいで、スツゴク近い。

うわっ!?! 綺麗!?! 色っばい!?!!

「目が覚めたのね…初めまして、勇者さま、私の名はヴァイン・ル
ーリィー・フォルド。魔王よ」

「……へっ?」

ええええええええええ??!?!!

固まる僕。その姿を見て、甘くお花が咲いたように笑う魔王さま。

「可愛い…」

「あのあの…僕勇者なんだけどっ」

「知っているわ。私が呼んだんですもの」

「え? ——っんん!」

ひやあああ!?!! キス? これはキスだよね???

突然されたキス。泣き虫で弱虫で落ちこぼれでドジな僕は女性にモテタ事がない。初めてのキスに僕は更にパニック。

「っ!」

しかも生暖かいものが僕の口の中で暴れてる。

しばらくすると、唇が離れた。

「はあ…はあ…」

頭の中がボーとする…。酸欠で生理的に涙が出た。

「キスも初めてなんて：最高。：ねえ、勇者様。私の伴侶になって？」

「へ？」

伴侶って旦那様って事だよね？

「えっと？」

「年上の女性は嫌？」

そう言って悲しそうな顔をする。

「いいえ！」

「じゃあ！」

僕の言葉に目を輝かせる。

でも：

「僕はスッゴク弱いです！」

「私が強いから大丈夫！ 守ってあげるわ」

魔王は笑顔で答える。

「モテタ事が一度もない魅力の無い僕です！ 貴方なら：沢山いるでしょ？」

「好みじゃない男性なんて興味ないわ。私が興味あるのは貴方だけ。それに：モテル男は女性にだらしが無いから嫌い」

「でも、僕は男のくせに泣き虫で！ ：ドジで誰にも必要とされない、寧ろ周りに迷惑をかけてるばかりで：！！！」

言いながら僕は泣き出す。

周りに迷惑をかけてばかりの僕はどこに行っても邪魔者扱い。頑張れば頑張るほど失敗して、厭きられて：。：嫌われる。

「貴方の泣き顔は可愛くって大好き。ドジなの？ 怪我したら治してあげるわ。」

魔王さまが僕の頬に触れる。

「私が貴方が必要としているわ。貴方の迷惑は私にとっては喜びよ。沢山頼って。」

熱のこもった目で僕を見る。初めてこんな目で見つめられた。

どきんっ！

「…ずっと、私の側に居て」

初めて必要とされた。

それはこの世の誰よりも強くて綺麗な魔王さま。

「貴方は私の夢にまで見た理想の男性よ」

「僕が理想？」

「ええ。だって貴方が欲しくて人間の王様にお願いしたんですもの……」

そして、魔王さまはポロツと涙を零した。

「っ！！」

魔王さまの涙はとても綺麗で、僕は無意識に魔王さまの濡れた頬を触った。

「…えっ…」

僕が触れた瞬間、魔王さまは頬を薔薇色に染めた。

…可愛い…。

「…まさか…涙が出るなんて……思わなかったわ。私、自分で思っていた以上に…」

照れた笑みを僕に向ける。

「好き…みたい…」

「っ！」

僕の胸が温かくなる。きつとコレは歓喜。

僕を必要としてくれる。

僕を好きだと言ってくれる。

ああ…胸の奥から何かが溢れていく……。

「…僕の名前はトール・デイズ」

「トール…？」

可愛らしい口から僕の名前が紡がれる。

「っ！！」

僕は思わず彼女を抱きしめた。

嬉しい、嬉しい、嬉しいっ！！！！

愛しそうに甘く僕の名前を呼ぶ声が。

愛しそうに甘く僕を見つめる瞳が。

そっか、僕は……。

「……ダメダメな僕だけど…宜しくお願いしまひゅ！」

…うううう…決まらない！！！！ 何でココでかむの僕！？

「…可愛い…」

落ち込む僕に対して、彼女は嬉しそうな笑顔。

本当に彼女は僕のドジも喜びみたい。普通の人なら冷ややかな目で僕を見る。

「……」

自然と僕も笑みを浮べた。

「っ！！…ごめんなさいっ！！」

突然、切羽詰った顔になった彼女は僕に謝ると、押し倒した。

「…そんな顔したら…もう、我慢できないっ！！！！」

「え？ ちょっ…ひゃんっ！！ …あん…」

その後、暴走した彼女に可愛がられたのは言うまでもないよね？

その1（後書き）

まあ、短所は他人から見ると長所が変わるよね。
とか言いつつ、ヘタレ主人公が書きたかっただけです…。

その2／魔王さまの条件／（前書き）

魔王さまの視点です。

その2 魔王さまの条件

魔族には百年に一回、繁殖期間があるのをご存知かしら？

種族によつては年がら年中発情している奴もいるけど、繁殖期間しか子供は出来ないの。だから繁殖期になるまでに魔族は伴侶をつくるの。

誰でもいいわけじゃないわ。

魔族は百年をかけて唯一の伴侶をつくるの。うふふ。気合入ってるわよね！

「魔王様。いつになったら伴侶をつくるのですか？」

城で働いている片目ゾンビのドナーが溜息混じりに私に質問をするの。

…その質問は嫌いよ。

「…」

その瞬間、空気が重く冷たくなる。…無駄に魔力が高いといくら抑えても少し苛立ったりするだけで漏れて周りに影響を与えちゃうの。まあ、ドナーは大丈夫だけど。

何故その質問が嫌いか？

答えは簡単よ。後、一年しかないというのに伴侶が居ないから！！それは、魔族にとって非常に馬鹿にされる事なのよ。人間の言う‘余り者’、‘いき遅れ’と呼ばれるものと似たようなもの。百年に一度しかない繁殖期間は魔族にとって重要な事なの。だから、魔族のトップでもある魔王^{わたし}に伴侶が居ないのは…非常に不味い…。

私だって好きでいないわけじゃないのよ?!
仕方が無いじゃない!

「…昔からお付き合いのある方々は?」

ドナーが私に質問をする。

え?

お付き合い????

あー。体の関係がある者のこと言ってるの?

「餌を伴侶にしたくないわよ」

私は淫魔と吸血鬼のハーフ。食事が色っぽい行いになるのよね。

「ステーキが好物だからって、牛を伴侶にしないでしょ?」

それと一緒によ。

その言葉に溜息をつくドナー。

「…一族の者達は?」

「…それこそ最悪よ。絶対無理。お断り」

あー思い出ただけで吐きそう…。

私の言葉に不思議そうな顔をするドナー。

「…一応他の種族からダントツの人気の方たちですよ?」

確か吸血鬼は優しそうな顔した美形やインテリちっくな美形が多かったかしら? 分かりやすく言うなら物語に出てきそうな王子様の様な美形ね。

…で、流し目が最高! っとか言ってたわね。

淫魔は整った筋肉美を持つ格好良い系の美形や渋い系の美形が多かったかしら? 分かりやすく言うなら物語に出てきそうな騎士の隊長ね。

…で、色っぽい声が最高! っとか言ってたわね。

「…外見は一応美しく出来てるし? それを武器にして餌を釣るわけだしね…」

だーけーど！ 性格？ 性質って言うの？ 吸血鬼はドSなのよっ
！！！！

現に私の母様は吸血鬼で、強そうな筋肉だるまがヒーヒー言うのが
堪らないとか言ってたわね。

奴らのイチヤイチャな光景はトラウマになるわ。

私には夫婦の営みの寝室が拷問部屋にしか見えなかったわ…。

だから吸血鬼は嫌。絶対に嫌。血を飲むのも見るのも好きで特に血
の匂いを嗅ぐと興奮するのよ。

その事実を知った時は手遅れ。既に虜。肉を切り刻まれても喜び…。
…誰になりたいか！！！！ そんなもの嫌あゝ

「…そう言えば同属嫌悪する種族でしたね」

…私の中にも同じ血が半分だけど流れてる。

「いじめっ子がいじめっ子を好きになる確率は果てしなく低いのよ。
…それに見ただけで腰が砕ける色気だったかしら？ 私には効かな
いしね」

「…ああ。魔王でしたね」

ドナーは思わず納得をする。

奴らの魅力的なチャームポイントは私の前ではマイナスに変わるの。
一族のヤロー達より何千倍もの魔力がある所為か、奴らの魅了の力
は私には効かないのよね。

色っぽい声は野太いだみ声に。

色っぽい流し目は喧嘩売る一秒前に。

一番酷いのは淫魔。快感が大好物の奴らは私の魅了は快感に変わる。
目が合えば興奮する。一言話せばイク。

…うざい。

「同属と会話らしい会話した事無いわね…」

「……そう言えば…広間を汚して下さったのは淫魔でしたね」

ドナーは思い出したらしく声が低くなる。ドナーはこの城を愛して

るから汚すもの、破壊するものは嫌うの。

昔、私が魔王の職についてから初めての報告会があったの。派遣先で起こったトラブルの報告を聞く予定だったんだけど…。

「話してみなさい」

私の一言に、広間にいた淫魔が暴走。喘ぐ、イク、そこにいた力の弱い生き物も支配され、更に暴走。一瞬にして乱交パーティーの出来上がり。

どうしたかって？

…知らないほうが幸せよ。

「…私も歓迎できませんね。…土族や蛇族はどうですか？」

ドナーも考えたくも無いのか、別の候補をあげる。

「人の形をしていない者との生殖行為は流石に遠慮したいわ…」

私、人型だし。

彼らは大きい石や泥の塊や全身鱗だったりするのよ。それを見て興奮する趣味は無いわよ。

「…確かに。物好きじゃないと出来ませんね…。じゃあ、人型タイプのゾンビは如何です？」

「…生まれた時から死んでいる冷たい我が子を抱けって？ 初の出産で？」

精神的に…キツイでしょ…。

私は遠くを見る。

「ですよね…」

ゾンビは死体が陰の力と魔力を体内に取り込む事によって生まれる。繁殖期に生まれた子供は生まれてから直ぐに呼吸と心臓が止まり、ゾンビへと姿を変える。

「…どこかに涙顔が最高に可愛い、吸血鬼でも淫魔でも無い人型じゃないかしら？」

「…難しいですね…」

すっと、目を逸らすドナー。

うん、分かってるわ。居たら伴侶にしているわよ。

「別に私より強くて、賢くって、整った顔で、お金持ちで、優しくって、私を愛してくれるゝ的な事は一切望んでないの?!」

「…人間の女性の理想の男性ってやつですね? 無茶苦茶ですが。」

「魔族にもっと人型が居ればっ……あ」

「?」

私は気付いたの。

「そうよ! 何で気が付かなかったのかしら?!」

別に魔族に絞んなくてもいいんじゃないの!!

「ふふふ」

思わず笑みがこぼれた。

人間の国王様へ

条件に当てはまる若い男性を募集いたします。

魔族の王より

人間の国々に送られた私^{魔王}からの手紙に人間の王達は頭を悩ませたみたいだけど、私の知った事じゃないわ。

その2 魔王さまの条件 (後書き)

次は不幸の手紙を受け取った人間の王たちの話。

その3 人間の王様 (前書き)

不幸の手紙を受け取った人の話 (笑)

その3 人間の王様

突然だが手紙が届いた。

我が国では希少価値の高いパリスノと言う半透明の素材を使った封筒。熱にも水にも衝撃にも強く頑丈。封筒を持った手の平は透けて見えるのに、封筒の中に入っている手紙は透けて見えないと非常に変わった素材だ。その素材を知らなかったら、中身を入れ忘れたのか？　つと、思うだろう。

「…」

手の平サイズのミニ竜が「この国の責任者宛です」と言っって私の手に直接渡った。

普通ならありえない。何故なら私は王であるのだから。

私宛に届く手紙は大量でそれを全て読むのは困難。なので、普段なら側近達が中身などを確認の上、私の元に届くのだが、相手が魔国の王からだった。

「っ！！！」

驚いた。

魔国が誇る世界で一番早い配達、くるぱっく。飛ぶ早さが最速な竜族が配達をする。最高時速は五百キロだっただろうか？　そんなスピードでも大丈夫な頑丈な体の持ち主。例え治安の悪い場所だろうが別料金と言う名の護衛や危険手当が必要がない。家にぶつかる家が壊れるほどの頑丈なのだから。しかも彼らは自分の体の大きさを自由に変えられるのでどんなものも運ぶ事が出来る。

…家を運んでいる時は流石に驚いたが…。

つとまあ、魔族の者が我が国^{人間のくに}に出入りするものが当たり前な程、我が国と友好関係を築いている。だが、この手紙は……。

「…我が国の男を差し出せってことだよな…」

何の為に人間の男を欲するんだ？

人間は、魔族より力や寿命。種族によっては美しさも劣る。だからこそ、不思議に思う。

…まさか…喰らう為か？

「……………」

何で俺の代でこんなものが届くんだ？

頭が痛い。

頭を抱えているとノックの音がした。

「入れ」

「失礼します。結界は最高ですけど何かありました？」

入ってきたのは我が国の結界の要の最高責任者。我が国一番の魔術師。外見は十代の可愛らしい少女だが、実年齢は…121歳。人間と魔族とのハーフである。

この者なら、この手紙の相談にうってつけだろう。

「今朝、この手紙が届いた」

「拝見しても？」

「ああ」

人間の国王様へ

一つ、魔術、剣術、武術が優れていない者。

一つ、泣き顔が可愛い者。

一つ、体と心が頑丈である者。

条件に当てはまる若い男性を募集いたします。

魔界の王より

「…伴侶の募集…」

「はぁ？」

伴侶だと？

「魔族は百年に一度子作りをします。百年に一度なので気合を入れて伴侶を探します。それが、来年。手紙の内容からだ…魔族に好みの男性が居なかったみたいです。で、人間の中から探す事に…
たって事ですかね」

「…つまり」

「重く考えなくて大丈夫ですよ。友好関係を築くために政略結婚とかするじゃないですか。王族や美男や優秀な人間を差し出せって言っているわけじゃないんですから。…まあ、弱くてヘタレで、いじめ慣れしてる者を探すのは大変ですけどね…」

「…」

「うーん。武道会開いて弱い者選手権とか？ でも、本当に弱い人間ならそもそも武道会って言う言葉だけで参加しようとしなくていいですし…。魔力測定器の反対な装置でも作って探した方が早いかな…？
でも、武術、剣術はこの方法だと無理ですし…どうしましょうか？」

「…緊急会議を行う」

「では、皆様を召集しますね」

「ああ…」

まさかその召集に召喚魔法を使うとは思ってもみなかった。

…許せ部下達よ。

その3 人間の王様 (後書き)

説明的な文章で終わってしまった…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6052v/>

勇者さまを召し上がれ

2011年10月30日23時12分発行